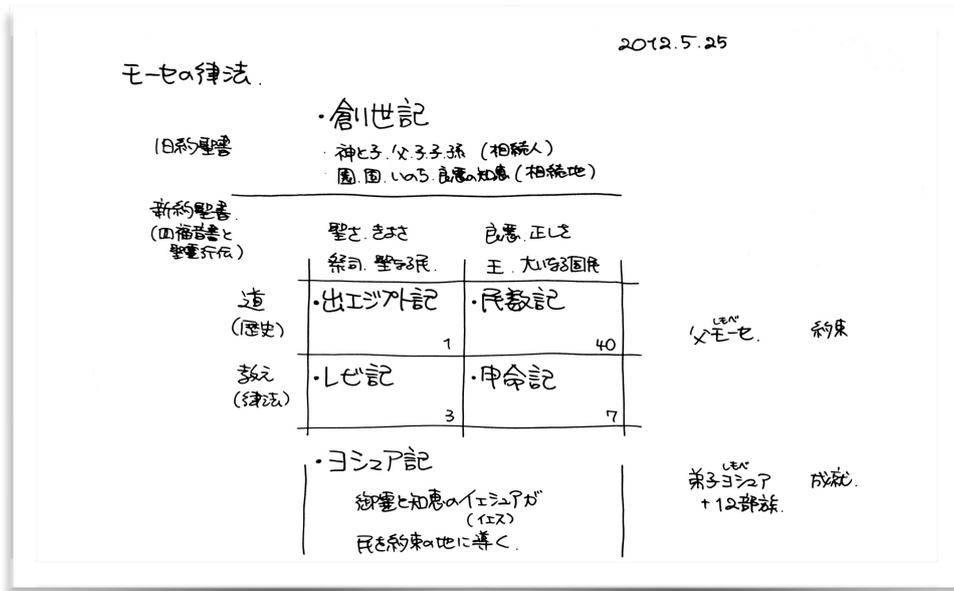
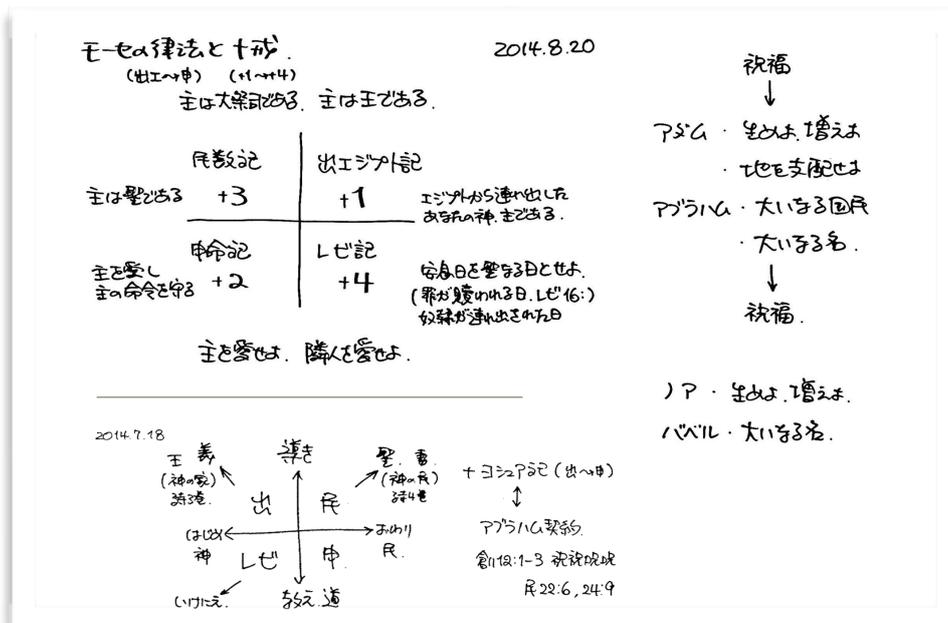


感じでしょ。その3つの方向に並行の重さが同じようにあるという意味で、より立体的ですね。なのが4つの書物の構造なのだろうというように、今回分析し直しました。



2012年のときに分析していたもの、出エジプト記と民数記は導きの歴史、レビ記と申命記が律法だろうというようなことを考え、出エジプト記とレビ記は、神様の聖さがあらわされる。それで、国が作られ、国の律法ということで、こちらは国側、王側ということが言えるのかなというように思っていたのですが、どうもそれで区別しようと思うと、区別しきれない。出エジプト記も申命記も十戒と判例法があるじゃないかと。



レビ記と民数記は、2014年の時は、聖さと考えていたのですが、民数記は聖さというのは無理があるかなあと。神様の聖さというよりは、神様の国、神様の御心、罪の赦し、悪から救う、まさに義しさだよなということで、その分析に苦労していました。

斜めのところでいうと、出エジプト記と申命記に、十戒と判例法が書いてありますけれど、これは、すべきことというのがこの共通点です。レビ記と民数記は、こうあるべき、民は聖でなければいけない、民が義と認められる、良しとされる、聖とされる、なるべき姿というのが民数記。

すべきこととなるべき状態、それでto doとto beと書いてありますけれど、こちらが道、救い出されて良い地へ戦って入っていくこの道。それと、聖なる者、良しとされる、これが神の妻にふさわしく聖い、神の子にふさわしく良いという神の似姿になると言っているのが、こちら(民数記、レビ記)。新しくうまれる、生まれたものが聖化される、神聖と聖化。約束の種が実を結んでこの姿に変えられるということが、なるべき姿、すべきことという共通点かと思えます。

主が…と言っているほうは、契約の箱と幕屋が共通しているのです。出エジプト記のほうには、後半が十戒と幕屋の作り方、そして、実際に幕屋を作るということが出エジプト記の半分です。民数記は、その契約の箱を中心として幕屋が移動していく。それが神の国民の中心にある。その契約の箱の栄光の雲が何度も出てきます。そして、移動していくわけです。この契約の箱と幕屋を中心にして、神様はしるしと不思議を行って導いている。

そうすると、こちらのレビ記と申命記には、祝福とのろい(26、28章)、祝福とのろいが書かれている新しい天、新しい地に導かれていく。新しい者に変えられる、新しい地に導かれるという初めに導かれて、終わりに祝福されるという感じです。初め(出エジプト記)があって終わり(レビ記)。また、新しい初め(民数記)があって、新しい終わり(申命記)みたいな形になっている。

祭りでいうと、過越し(出エジプト記)、七週の祭り(レビ記)、仮庵の祭り(申命記)、40年(民数記)ということです。初めがあって、最初の完成がペンテコステ、七週の祭りは3月の祭り、3日目の完成。この完成が全世界であらわされる七週の祭りということです。初めと終わり、初めの終わりと終わりの終わりのような感じです。この二つは収穫の祭りです。レビ記と申命記に該当するところです。

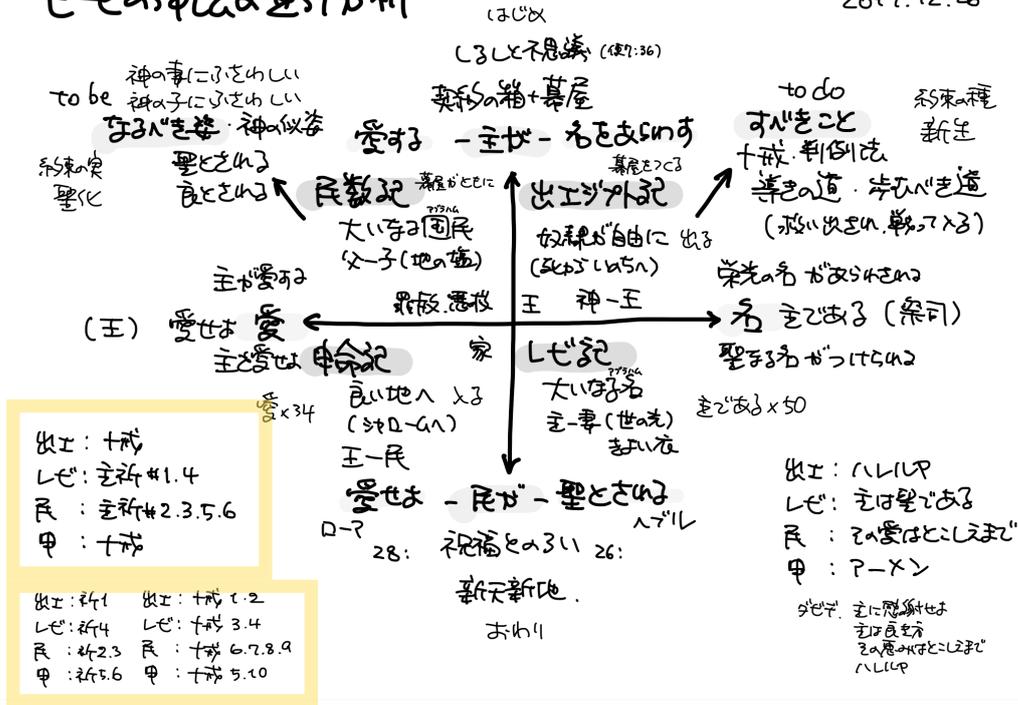
初め、しるしと不思議によって導かれて、新しい天、新しい地が作られていく。出エジプト記の出来事と民数記の40年の荒野の事が、「しるしと不思議」と言われているのは、使徒行伝のステパノの証しの中にも直接書かれています。

レビ記のほうでは、民が聖とされるという話を中心でした。申命記の中では、神様を愛して隣人を愛しなさいというのが中心になっています。まるで新約聖書でいうと、ヘブル人への手紙とローマ人への手紙のようなそういうテーマですね。これが、祝福とのろいというほうです。

レビ記が主と妻、民数記は父と子。レビ記のほうは、聖い衣を着て、世の光となる。民数記のほうは、父が子を導いて訓練する、地の塩、裁きを行って義に導くという意味で、世の光、地の塩ということも言えるのではないのでしょうか。大いなる名が与えられ、大いなる国民となる、これはアブラハムの契約の祝福の成就するところです。神様が王を与え、家を作る、これはダビデの契約につながっていくと思われれます。

モーセの律法の進行分析

2017.12.26

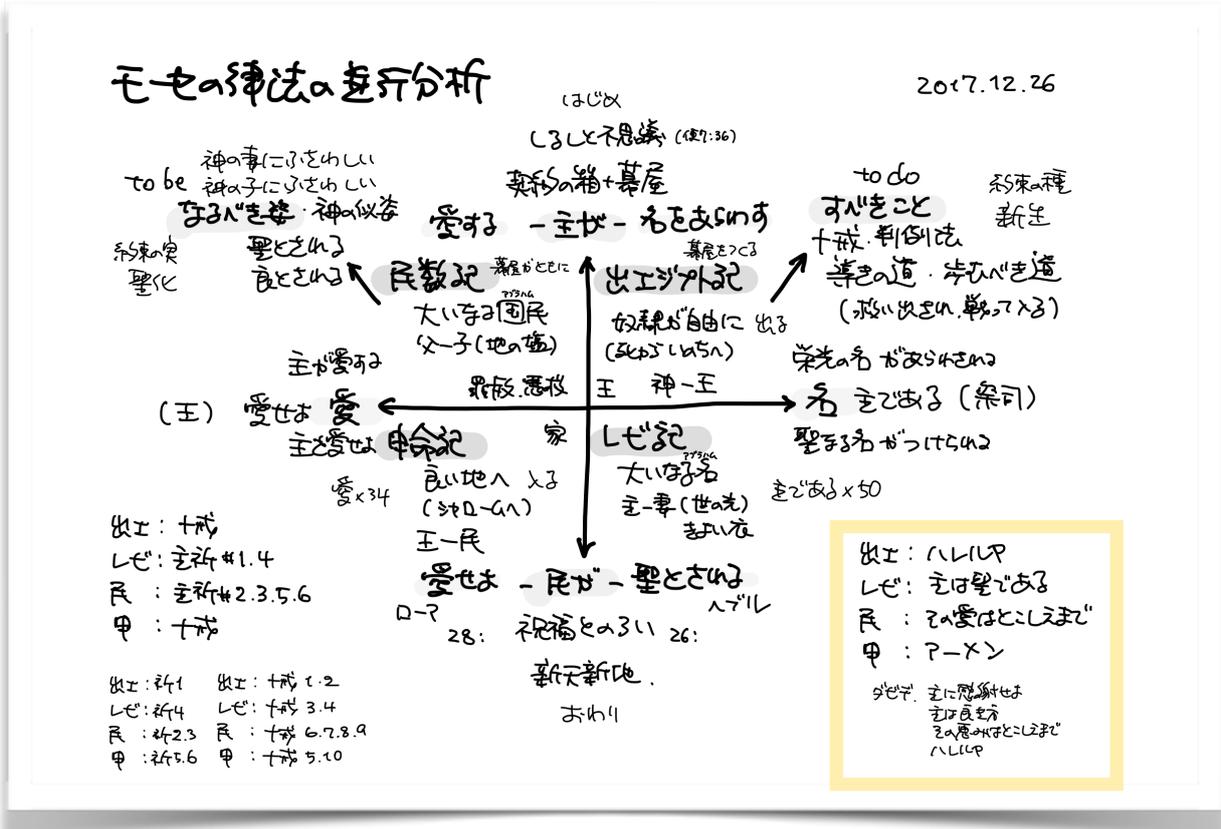


主の祈りの分析をしていてここに来たのですけれど、主の祈りは、「報い」の型だと、十戒は「道」の型、パターンですという話をしていました。それで見ると、出エジプト記は「道」、申命記も「道」、レビ記はなるべき姿、行くべき報いの最終形と考えていましたので、ここ(レビ記、民数記)を主の祈りで見ると、レビ記のほうは、主の祈りの1番と4番。1番と4番と言っているのは、御名が聖とされるように、そして、日毎のパン、命が与えられるようにというのがこちら(レビ記)。民数記のほうは、2,3,5,6となっています。2,3,5,6は全体の構成と一緒にですけど、御国が来て、御心が行われ、罪が赦されて、悪者から救われる。ただ、この40年間はパン、マナも与えられていましたので、4番目のことが関係ないわけではないです。この1,4,2,3,5,6これは、一つのことを言っていますので、お互いにオーバーラップしていることはもちろんあると思いますが、こちら(レビ記)は、1,4聖さ、いのちについて。(民数記)は義しさ、御国、良いことについてということが、主の祈りの課題として見れるのではないかということです。

…とはいうものの、出エジプト記、申命記も主の祈りと関係ないわけではないので、主の祈りだけでこの4つを見てみたらどうなるかというのがここに書いてあります。主の御名があらわされる出エジプト記、いのちが与えられる主の祈りの4番目(レビ記)、御国が建て上げられる、神様の軍、万軍が作られる2番目と3番目(民数記)。そして、互い愛し合うということですね、罪を赦して悪から救われる、悪を嫌って義しさを行う民が作られるという意味で5番目と6番目(申命記)。この主の祈りの枠組みで見るとも出来るかもしれません。

十戒だけでこの4つを分けることも可能だろうというのがこちらです。十戒の1番目と2番目、エジプトから連れ出した神である、偶像に従うな。御名を汚すな、みだりに唱えるな、安息の一番のヨベルの年がレビ記に書かれています。6,7,8,9という命令を神様が守ってくださったと、幕屋が共にいて守ってくださった。だから、父の命令を聞き、

正しい相続を得られるようにというのが5番目、10番目の申命記と言えると思います。幕屋を作って、幕屋が共にいる、守られるというのが民数記ですね。



全体の流れとしてみると、ダビデの祈り、詩篇の概略、幕屋を捧げる時のレビ人が歌う歌の歌詞ですね。「主に感謝せよ、主はまことにいつくしみ深い、その恵みはとこしえまで、ハレルヤ。」という言い方がありますがけれど、その言い方になぞらえて4つの段落を見ると、エジプトから出る、これこそハレルヤということですね。出エジプトのハレルという詩篇群もありますね。ハレルヤ。そして、主は良い方というよりは、主は聖であるというのがレビ記です。その恵みはとこしえまでというところに該当する民数記は、その愛はとこしえまでと。それで、最後のところは申命記なのですが、ハレルヤというよりはアーメン、アーメンと言えというのが申命記27章にありますね。「ハレルヤ(出エジプト)、主は聖である(レビ記)、その愛はとこしえまで(民数記)、アーメン(申命記)。」という4つの構成になっている。それは、ダビデはもちろんわかっている、主に感謝せよという言い方で、神様の契約全体をほめたたえる歌としてこの祈りを作った、書いた、指示したということにもなるかと思えます。